

～気象変動に打ち勝つ米づくりは、健苗の育成から！～

コシヒカリの田植えは5月15日を中心に、育苗日数は20日間を目安にして計画的に浸種を開始しましょう。また、育苗期間は高温になりやすいので、ハウス内の換気を徹底し、活着の良い健苗の育成に努めましょう。

【田植予定日に合わせた育苗計画の目安(中山間地を除く)】

田植予定日	浸種	催芽	播種	育苗日数
5/10	4/8頃	4/18頃	4/19頃	21日間
5/15	4/16頃	4/24頃	4/25頃	20日間

育苗日数が長くならないように、田植予定日に合わせた育苗計画を立てましょう。



※栽植密度70株/坪として、必要箱数を準備しましょう。

1 コシヒカリの育苗作業スケジュール(5月15日田植えの場合)

月日	作業	温度管理	作業管理のポイント
4/15	機材消毒 比重選 ↓ 水洗 ↓ ネット袋詰		・育苗箱等は使用する前にイチバンで消毒する(希釈倍率 500～1,000 倍)。 ①比重選で充実の悪い粃等を除去 ・硫安は良く溶かしてから使う。 ・比重選後の種粃は十分水洗いし、ネット袋にぎっしり詰めこまない。 ※消毒済み種子を使用する場合は、比重選を行わず、 浸種作業からスタート する。 ・品種ごとにネットの色を変えるなどして、取り違えが無いように工夫してください。
4/15	種子消毒	水温 10℃以上を確保	②種子消毒を徹底し病害の発生を予防 ・ モミガードC水和剤の200倍液で24時間浸漬 する。 ・効果ムラがでないよう、消毒中にネット袋を2～3回攪拌する。 ・消毒後は水洗いせずに浸種作業に入る。 (注:廃液を川や用水路に流さない)
4/16	浸種	水温 10～15℃を確保	③浸種は積算温度を十分に確保 ・水温10～15℃を確保し、 積算温度120℃を目安に浸種 を行う。 ・特に、 浸種開始日は、水温が12℃となるよう 心掛ける。 ・ 浸種桶は日光が直接当たらない場所(日かげ等)に置く とともに温度計を入れて、定期的な水温確認に努める。 ・酸素不足を防ぐため、2日に1回程度の割合で水を交換する(ただし、消毒済み種子を使用する場合は、 種子消毒効果を高めるため、浸種開始後3日間は水を交換しない)。 ・水温が高くなり芽が伸びる恐れがある場合は、冷たい水に浸ける。 ・浸種完了の目安は「種子粃の胚乳がアメ色で透明になった頃」とし、必ず確認する。

【比重液の作り方(水10ℓの場合)】

	比重	硫安
うるち	1.13	2.5kg
糯・酒米	1.08	1.5kg

【種粃に対する薬剤量の目安】

種粃量	水	薬剤
10kg	20ℓ	100g
30kg	60ℓ	300g

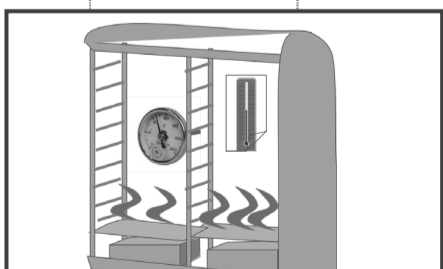
希釈倍率:200倍

【浸種の主な効果】

- 発芽に必要な水分の吸収
- 発芽阻害物質の除去
- 発芽の揃いを良くする

※冷たい水に長く浸けるのではなく、適温の水に10日程度しっかり浸けて積算温度を確保しましょう！

4/24 **催芽** (育苗器) 30℃で 24時間程度

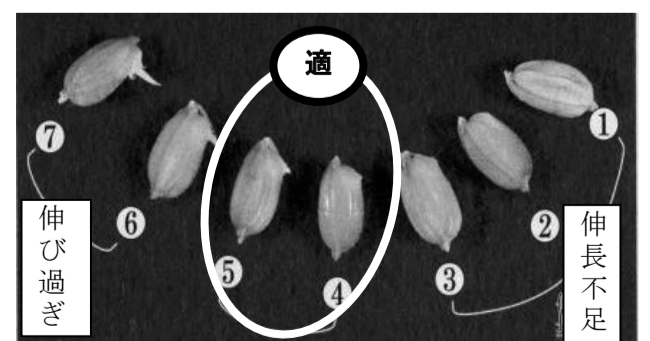


- ・事前に試運転を行う。
- ・温度計は2つ設置し、正確かどうか事前に確認を行う。

④芽の長さをこまめにチェック！

- ・催芽の程度は、**ハトムネ～芽長2mm程度**(右図)。
- ・育苗器を使う場合、ネット袋にたくさんの種粃を入れすぎず、1日2～3回程度上下段を入れ替えたり、ネット袋を裏返すなどムラなく芽出しをさせる。
- ・均一に播種するため、種粃の脱水は十分に行う。(粃が手につかない程度まで陰干しを行う)
- ※**循環式催芽器(ハト胸催芽器)は使用しない**。(細菌性病害発生防止のため。ただし、温湯消毒の体系処理(催芽時に食酢浸種処理)を行う場合を除く。)

【催芽の目安】



ウラに続きます

月日	作業・温度	作業管理のポイント						
4/25	播種・出芽 (出芽は約3日間) 育苗器の設定 出芽温度は 30℃ (温度厳守) ※サーモスタットは 事前に点検	①うすまき(乾粃 120g/箱)で健苗づくり ・播種時にダコレート水和剤(1000倍・箱当たり10)を散布しましょう。 ・前年に細菌性病害(もみ枯細菌病、褐条病など)が発生した場合は、播種後覆土前にカスミン液剤(4~6倍液・箱当たり50mL)を散布して下さい。 ・覆土の量は、種粃が十分隠れる程度としましょう(転び苗等の防止)。 ・出芽温度は30℃を厳守し、途中で、こまめに温度や出芽状況を確認しましょう。出芽長は1cm程度とし、出しすぎに注意してください。 ・播種時に苗箱施薬剤を処理する場合は、下記の病害虫防除を参考にして下さい。						
		【乾粃 120g の目安】 <table border="1"> <tr> <th>乾粃</th> <th>催芽粃の容量</th> <th>水切り後重量</th> </tr> <tr> <td>120g</td> <td>200mL</td> <td>150g</td> </tr> </table> 厚まきは、軟弱徒長や病害の発生を助長します 	乾粃	催芽粃の容量	水切り後重量	120g	200mL	150g
乾粃	催芽粃の容量	水切り後重量						
120g	200mL	150g						
4/28	搬出・緑化 (緑化は2~3日間) ハウスの温度は 昼:25℃以下 夜:10℃以上	②ハウス搬出直後の管理 ~気象変化が激しい時期です。こまめな温度管理を心掛けましょう!~ ・搬出は原則として午前中に行い、かん水は覆土を落ち着かせる程度に必ず行いましょう。 ・苗の白化を防ぐため、速やかに被覆資材で遮光し、緑化したら被覆資材を取り除きましょう(約3日後)。 ・温度計は育苗箱の横で、苗の高さに合わせて置き、こまめに温度を管理しましょう。						
	春は時々強い風が吹きます。 ハウスの風対策は万全に!!	 高温に注意 晴天時は気温が低くてもハウス内の温度は急激に上昇するため、搬出直後でも苗がヤケないように換気を徹底しましょう。						
		・搬出時に低温の場合は、搬出を見送るか、寒冷紗等で被覆し、保温に努めましょう。						
4/30	硬化前期 ハウスの温度は 昼:25℃以下 夜:10℃以上	③ハウス内の温度が25℃を超えないよう換気を徹底 ・水不足による葉ヤケを防ぐため、床土の乾きに応じてかん水を行いましょう。 ・水をかけ過ぎすぎると根の伸びが悪くなるとともにカビ等が発生しやすくなります。 ・気温の低下(5℃以下)が予想される場合は、被覆資材で保温しましょう。						
		 気温が高くなったら要注意 しっかり換気を!						
5/5 5/14	硬化後期	④田植えの1週間前頃からは夜間もハウスを開けて換気 ・かん水は原則として午前中に1回たっぷりとかけましょう。 ・低温や強風が予想される場合を除き、昼夜ともにハウスのすそを開けましょう。 ※強風時でも温度が高い場合は、風下のすそを開けて換気しましょう。						
5/15	田植え	栽植株数70株/坪、植付本数3~4本/株、植付深さ3cmで初期の茎数を確保!						
		十分に外気に慣らすことで、初期生育が良好となります。						

2 育苗期間中の病害対策

対象病害	使用農薬	希釈倍率	散布量	防除時期	使用回数
白カビ、青カビ、赤カビ	ダコレート水和剤	400~600倍	500mL/箱	播種時~緑化期(播種14日後まで)	2回まで
ムレ苗、苗立枯病	タチガレエースM液剤	500~1,000倍	500mL/箱	発芽後	1回のみ
青カビ	ベンレート水和剤	500~1,000倍	500mL/箱	播種7日後頃まで	2回まで

☆苗箱施薬による病害虫防除 ~苗箱施薬は規定量を確実に入れましょう~

使用農薬	散布量	施薬時期	対象病害虫	使用回数
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	葉いもち、白葉枯病、イネミズゾウムシ、イネツトムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネヒメハモグリバエ	1回
Dr.オリゼフェルテラ粒剤	50g/箱	緑化期~移植当日	葉いもち、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ツマグロヨコバイ、イネツトムシ(白葉枯病、イネヒメハモグリバエ:移植3日前~移植当日のみ)	1回

※紋枯病の常発地の場合(特に早生・晩生品種の場合)

使用農薬	散布量	施薬時期	対象病害虫	使用回数
エパーゴルワイド箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	葉いもち、白葉枯病、 紋枯病 、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネツトムシ	1回

近年、紋枯病の発生は多くなってきています。多発生すると収量・品質が低下するので、状況に応じて適切に防除する必要があります。

(注意①) ルーチンアドスピノ箱粒剤、エパーゴルワイド箱粒剤は粒径が小さいので、処理前に必ず目盛を調節し、処理量を確認して下さい。

(注意②) 育苗ハウスで野菜を栽培する場合は、播種同時や育苗ハウス内での施薬は行わないで下さい! (ポジティブリスト対応)。

お 知 ら せ

○消毒済み種粃の無料廃棄処分について

・4月27日(月)~5月29日(金)まで、昨年と同じ場所に廃棄ボックスを設置します。必ずネット袋に入れた状態での持ち込みをお願いします。設置場所:立山(立山管理センター)、上市(宮川2号倉庫)、滑川(滑川営農経済センター)

◀次回の営農情報(田植前後の管理)は**4月24日**頃の発行予定です。▶